

# 語彙 (理論・現代)

齋藤倫明

## 一、はじめに

昭和五十七・五十八年における本欄の執筆者である森田良行氏は、二年後、あるいは四年後の展望の際には、「本特集のような『語彙(理論・現代)』を、他から切り離され孤立した島宇宙のように、垣で仕切った範囲として扱うことは困難となるであろう。」と予測されたが、まさにその四年後にあたる今、本欄を執筆するにあたって筆者はこの言葉の「重み」を実感している。森田氏が右のように述べられた背後には、最近の意味論と文法論との緊密な関係を当然のものとする認識、および現代語の意味論と語義の史的研究との統一への要請といった、言葉の意味の世界における研究のあり方に対する氏一流のとらえ方があったわけだが(そしてこの点については筆者も全く同感であるが)、ここでは、また違った側面からこの言葉の持つ意味をとらえてみたい。

問題は「理論」という言葉をめぐってあるように思う(この言葉をどのように規定するかは難しい問題であるがここではその点には立ち入らない)。本誌の展望では、「語彙」に限らず「文法」「音韻」「文字・表記」なども「史的研究」編と「理論・現代」編とに分かれている

が、当然のことながら、何も理論的な研究が現代語においてしかできないということはないのではないか、ということなのである。話を語彙研究に限ってみても、今期の範囲内では、たとえば①小野正弘「中立的意味の変化の一解釈——形容動詞化と「ウナギ文化」——」(『国文鶴見』23、昭61・12)のように、「中立的意味からプラスまたはマイナスの意味へ」と意味が変化する過程に何らかの共通の要因を探ろうとする、まさに理論的と言っている研究も見られるし、他にも②山田みどり「意義拡張の際の原義のかかわり——「うちまかせて」の場合——」(『武蔵野女子大学紀要』21、昭61・2)、③小林みち子「『大きな』」「『小さな』」「『おかしな』」の成立要因について」(『山口国文』10、昭62・3)などのように、古語を対象とはしているものの、理論的な色彩の強い研究も結構多いのである(右に挙げたのはそのほんの一例である)。それに、テーマにしても研究者にしても、古語と現代語というように両者が截然と分かれているわけでもない。従って、そういった研究もできるだけ本欄で取り上げたいと思うのだが、一方で、それは本欄の担当範囲を逸脱することになるのではないか、といった心配もないことはない。「史的研究」と「現代・理論」研究という区分は確かに便利なものであるが、それはあくまで便宜的なものであり本

質的なものではないということを、やはりもう一度再確認すべきではないかと思うのである。

## 二、今期の特徴

今期特に目立った点(必ずしも今期だけの特色というわけではないと思うが)として、以下の三点を挙げることができよう。

まず第一点として、対照研究が非常に多かつたということである。執筆者としては留学生や客員研究員など外国人が多いが、もちろん日本人の手になるものもある。また、取り上げられた言語としては、中国語、韓国語が多いが、その他にもモンゴル語〔④久野マリ子、佈仁巴圖「日本語・モンゴル語対照研究——身体名称を使った慣用表現を中心に」(「国学院大学日本文化研究所紀要」59、昭62・3)〕、インドネシア語〔⑤ニニエック・シャフルディン「自然に関することわざについて——インドネシア語と日本語の場合」(「待兼山論叢(日本語篇)」21、昭62・12)〕、ポルトガル語〔⑥大里泰弘「空間の量を表す形容詞について——日本語ポルトガル語を対照して」(「九大言語学研究室報告」8、昭62・3)〕など多岐に亘っている。こういった傾向は最近の学会発表などにも見られるところであり、大変歓迎すべきことである。その他雑誌「日本語学」による特集⑦「対照研究の諸側面」(昭62・10)もあつた。ただ、あえて一つ注文をつけるとするならば、こういった研究を行なう場合、対照研究という方法論が持っている利点、すなわち、ある言語を他言語と比較対照することによって、それらの言語を個別に眺めていたのではなかなか気づきにくい点を明らかにすることができるということ、を十分に引き出せるような形で行なつてほしいと思う。筆者の目から見ると、少なくとも日本語の側から見てそう

いった成果を示してくれた論というのが意外に少なかったように思へ残念である。

第二に、心理的な研究が比較的目的にいたということが挙げられる。もともと言葉の研究というのは学際的なものであり、心理学に限らず哲学や文学、あるいは数学など様々な分野からのアプローチが可能なのであるが、今期の語彙研究についてはその中で心理学的なアプローチのものが多かつたことであらう。

筆者の見るところでは、それらは以下の三種類に分けることができる。一つは、意味に関する研究で、⑧竹内晴彦、Pieter M. KROONENBERG、多屋秀人、宮埜寿夫「温冷感・乾湿感に関する言葉の意味の分析」(「計量国語学」15—6、昭61・9)のようなSD法による分析、あるいは、⑨山田洋子「ふれるということ——異文化間のコミュニケーションのための日本語の意味の心理学的分析」(「愛知淑徳短期大学研究紀要」25、昭61・3)のような、「ふれる」「さわる」「ふれあう」といった動詞の意味分析を通して日本人のものの見方、考え方を探ろうとするものなどが挙げられる。二つめは、幼児における意味概念の発達に関する研究で、⑩岩田純一「空間的な量を表す概念とことばの発達(1)・(2)」(「金沢大学教育学部紀要(教育科学編)」35・36、昭61・2、昭62・2)、⑪見沢めぐみ「幼児におけるあいまいな指示詞の解釈」(「東京大学教育学部紀要」26、昭62・2)などがそれに当る。三つめは、擬声語、擬態語に関するもので、⑫学阪直行「擬音語・擬態語の感覚尺度(1)——ことばの精神物理学」(連想順位表に基づく分析)——(「追手門学院大学文学部紀要」20、昭61・12)、⑬丹野真智俊「オノマトペにおける清音と濁音の対比(1)——連想語の分析」(「佐賀大学教育学部研究論文集」35—11)、昭62・7)などが挙げられるが、いずれも連想実験

による調査研究である点が興味深い。ただ、両者ともまだ実験結果の紹介が中心であり、具体的な分析、考察は行なわれていない。

第三に、個別的な語類に関わることであるが、擬声語、擬態語に関する研究が多かったということが挙げられる。そして、これは上述の第一の点と関係がある。というのは、後に具体的に見るように、今期のこの種の研究のかなりの部分を対照研究が占めているからである(⑫⑬)に見られるように、擬声語、擬態語は心理学的研究の対象としても重要なものである)。

ただ、これらの研究を讀んでいて一つ感じることは、研究対象(「ガラガラ」「びっしょり」といった語)を指し示す用語をもう少し統一できないかという点である。「擬声語」「擬音語」とも、「擬態語」と区別する人、どちらか一方にまとめてしまう人、「オノマトペ」という語を使う人(これにも、擬声語、擬態語双方の意味を含める人と、擬声語の意のみ用いる人がいる)、「音象徴語」と一括する人、等々実に様々なのである。それぞれの用語を使う人にはそれなりの理由があるのであるが、読む方にしてみれば、できるだけ統一してもらいたいものだと思う。

### 三、分野ごとの概観

以下、各分野ごとに具体的にみてゆくこととするが、本欄では、明治時代語のみを対象としたもの、および方言における語彙を対象としたものは取り扱わないこととする。

### 三—1 辞書類、語彙調査

今期、辞書類はあまりなかった。各分野で取り上げる若干の特殊なものを除けば、一般的なものとしては、⑭国際交流基金編「基礎日本語学習辞典」(凡人社、昭61・12)、⑮林史典、金子博、霧岡昭夫、他編「国語基本用例辞典」(教育社、昭61・2)くらいであろうか。⑭は「日本語を学習する外国人が、比較的初期の段階において使用することを目的として編集されたもの」(はじめに)であり、二八七三語を収録してある。見出し語はローマ字書きで排列はアルファベツト順、例文にはローマ字表記と英訳が添えられている。これらの点から見て、従来の「外国人のための基本語用例辞典(第二版)」(文化庁)などよりも一段階初級者向けの辞典であると言える。⑮は辞書というより用例集であるが、以前同じ編者らによって出された「小学ことばのつかいかた辞典」(教育社)の姉妹版にあたり、一般むけに大幅に増補されている。なお、個人の手になるユニークな用例集として⑯見坊蒙紀「現代日本語用例全集1 アーキ」(筑摩書房、昭62・11)が出たことも付け加えておく。

国立国語研究所から語彙調査の報告書が三点出版された(いずれも秀英出版)。⑰「中学校教科書の語彙調査」(昭61・4)、⑱「中学校教科書の語彙調査II」(昭62・3)、⑲「雑誌用語の変遷」(昭62・5)がそれである。他にも非売のもの何点かあるが省略する。⑰⑱は国研報告76、81の「高校教科書の語彙調査」の続編にあたり、⑲は、一九〇六年(明39)から一九七六年(昭51)までの「中央公論」の中から、十年きざみで各年一万語、計八万語を抽出して様々な角度から調査研究した報告書である。また、同じ国立国語研究所から⑳「日独仏西基本語彙対照表」(秀英出版、昭61・4)が出されたが、これは

国研報告78『日本語教育のための基本語彙調査』で「設定提示した語彙について、外国語の基本語彙と対照してその異同を見ようとして作成したもの」(「刊行のことば」)である。

### 三―2 語彙一般

この分野における今期の大きな収穫として、②森岡健二「現代語研究シリーズ1 語彙の形成」(明治書院、昭62・7)が挙げられよう。本書は「現代語研究シリーズ」(全五巻)と銘打たれた著者の著作集の第一巻であり、その後第二巻、第三巻と刊行されているが、書名からもわかるように、本書が著者の語彙研究を代表する巻である。著者の語彙研究は、本書の目次を見てもわかるように、語彙体系論と訳語研究が大きな二本の柱となっているが、前者に関しては、本書の解説で松岡洸司氏も述べておられるように、その基盤に、徹底的に語の形態と機能に基づいた著者独自の形態論があることを忘れるわけにはいかない(後者の解説は湯浅茂雄氏である)。著作集ということで、内容的には一度発表されたものであるが、著者の語彙に関する研究をこのようにまとまった形で目にする事ができるのはありがたい限りである。

語彙の分野では、たとえば文法などに比べると、大学初年級用のわかりやすい入門書が今までほとんどなかった。しかし、今期その空白を埋めたと言つていい本が現われた。②城生佰太郎「オタミミ・ペンペの言語学―語彙論への招待―」(日本評論社、昭62・3)である。この不思議な題名の由来については本書を御覧いただきたいが、本書の一番の特質は、豊富な具体例と著者の軽妙な語り口とにある。しかも、単に読んでわかりやすくおもしろいというだけでなく、よ

く読むと、著者の言語研究に対する姿勢のようなものも伝わって来いろいろと参考になる所が多い。

語彙論、あるいは意味論において確固たる理論を持つことは難しいが、今期そういった意味で貴重な著作が出た。②野林正路「意味をつむぐ人々―構成意味論語彙論の理論と方法―」(海鳴社、昭61・7)である。著者によれば、我々は言語の持つ認識と伝達という二つの機能に依り、「認識言語」と「伝達言語」という二系列の異なった言語をあやつつて言語生活を営んでいるという。後者は、「伝達」という実用的な効用に対応するものであり二分法の手法で構成されるが、前者は、「認識」という体系的な効用に対応するものであり四分法( $x^+y$ 、 $x^-y$ 、 $x^+y^-$ 、 $x^-y^-$ )の手法で構成される。従来の語彙論意味論は、「認識言語」の存在に気づかず「伝達言語」にのみ目を向けていたため二分法的な分析に終始しており、十分な効果を挙げないという。現段階においては、著者のこの論に対して筆者は明確な判断を下すことができない。ただ興味深く思うのは、この論の発展が $x$ とも $y$ とも呼ぶが( $x^+y^-$ )のような中間種の存在に契機づけられているという点である。筆者も著者と全く立場を同じくするわけではないが、意味論、語彙論にとつて中間種の存在が重要であるという点については、全く意見を同じくするからである。なお、野林氏には、同じ立場から書かれた②「山野の思考―(かまぼこ)きつま揚げ(テンペラ)フライをめぐる認識と語彙―」(海鳴社、昭61・8)という小冊子もあるので参照されたい。

他に語彙一般に関わるものとしては、語彙統計資料において順位を扱う場合の注意と処理の仕方について述べた②田中章夫「語彙研究における順位の扱い」(「国語語彙史の研究」7、昭61・11)、教育の

場における基本語彙の制定の仕方について述べた②⑥浜本純逸「教育基本語彙の選定」(『国語語彙史の研究』8、昭62・11)、詩における漢語語彙について考察した②⑦下河部行輝「詩における語彙、漢語——『帆・ランブ・鶴』と『測量船』——」(同右)などが目についた。また対照研究としては、基本語彙を扱った②⑧前田均「日中基本語彙比較」(『山辺道』30、昭61・3)、②⑨村木新次郎「言語間の意味分野別語彙量の比較——日本語・中国語・ドイツ語の場合——」(『計量国語学と日本語処理——理論と応用』昭62・3)、日英語の語彙を出自による構成という点から比較対照した③伊藤栄子「現代日英語の語彙の構造」(神戸女学院大学論集)33・2・3、昭62・3)などがあつた。

### 三—3 意味に関して

今期も意味に関する研究は非常に盛んであつた。おそらくこの分野が論文の数も一番多かつたのではないかと思う。雑誌『日本語学』が、③①「類義語・多義語」(昭61・9)、③②「対義語」(昭62・6)、③③「文の意味」(昭62・7)と意味に関する特集を三回組んでいることもこの辺の事情をよく反映していると思われる。ただ、意味の問題を正面切つて扱つた著作となると意外に少なく、先の②⑧の他は②⑩平澤洋一「ことばの意味と表現」(東峰書房、昭62・3)が目についた位である。③④は著者の言によれば、「知的意味と情緒的意味の差異、情緒性の表現類型、文と意味の流れ、句点文連接と意味の流れについて、ささやかな研究成果をまとめたもの」であり、情緒的意味の問題と、文や文章における意味の流れの問題の二つが本書の大きなテーマであると言ふことができよう。

意味の問題に関しては、類義語が大きなテーマの一つであるが、

今期このテーマに関する論はそれほど多くなかつた。ただその中には、やはり③⑤東京都立大学日本語研究会編『日本語研究』(8、昭61・12)が目をついた。しかし、個々の論を見ると、冒頭の藤本泉「ころえる・わきまえる」をはじめ、従来の本誌の分析に比べ比較的份量の多いものが目立つように思う。これは分析法が洗練され、様々な手法や分析の観点などが蓄積されてきた結果だと思われるが、逆に言えば、マンネリズムに陥る危険性もないわけではない。そういう意味では、「編集後記」にもあるように、「今後は、分析対象を広げ、これまであまり取り上げられていない語グループを分析する際の方法論の確立」をめざしてほしいと思う。その他には、③⑥大里泰弘「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」(『九大言語学研究室報告』7・昭61・3)があつた。また対照研究として、③⑦張徳芬「日本語の類義語「きれい」だ」「美しい」「麗しい」の異同と中国語「漂亮」「美麗」との対比」(『徳島文理大学比較文化研究所年報』3、昭61・7)、③⑧易友人「後で」「後程」「いずれ」「いつか」「今に」「今度」「そのうち」の意味的差異」(『愛文』23、昭61・9)があつた。

一方、今期において特色的だつたのは、従来の類義語の意味分析とは若干異なり、形態的にも関連のある語や句を取り上げその間に存在する微妙な意味、用法の違いを記述しようとしたものが目立つた点である。③⑨倉持保男「腹が立つ」と「腹を立てる」(『松村明教授古稀記念 国語研究論集』昭61・11)、④⑩松井栄一「現代における『薄らぐ』と『薄れる』」(同右)、④⑪坂口頼孝「人びと」と「人たちの構文的差異」(『別府大学国語国文学』28、昭61・12)などがそうであるが、特に③⑨は、標題の句の間に「うれしい」と「うれしがる」、「悲しい」と「悲しがる」といった対と同様の相違を見出したものであ

り、問題の設定の仕方、処理の仕方に倉持氏のセンスが光る。

類義語と並んで多義語も意味研究の重要なテーマの一つであるが、それに関する論は多かった。列挙すると、④丹保健「多義語の語義特徴についての小見——副詞を例として」(『文芸研究』Ⅲ、昭61・1)、④③同「辞書間にみられる多義記述の相違について——音象徴語を中心として」(『国語語彙史の研究』7)、④④大谷伊都子「多義動詞の一考察——『だす』「あげる」「たてる」を例として」(『論集日本語研究 現代編』昭61・11)、同④⑤「動詞『つける』の用法——抽象事を表わす語との結びつきから——」(『国語語彙史の研究』8)、④⑥近藤仁美「多義の副詞『よく』についての考察」(『国語学研究』26、昭61・12)、④⑦西尾寅弥「多義語と隠喩」(『大妻女子大学文学部紀要』19、昭62・3)などが挙げられる(④⑤は通時的な研究である)。このうち④⑦は、多義語における基本義とそこから隠喩を介して生じた転義との間に、関係性の強弱に従って五つの段階を設定したものでありその点が新しいが、西尾氏も述べているように、その判定をいかにして客観的なものにするかが今後の問題として残るであろう。なお、対照研究としては④⑧張小雲「日本人の動的思考様式と身体語——辞典からの啓発——」(『三重大学日本語学文学報』5、昭62・3)があった。

その他意味に関わる論で目にしたものを挙げると、④⑨西尾寅弥「語の有縁性について」(『松村明教授古稀記念 国語研究論集』)、⑤①細川英雄「風は寒いか冷たいか——温度形容詞とその用法について——」(『国語学』研究と資料』10、昭61・10)、⑤②宮地裕「かくれた意味について」(『論集日本語研究 現代編』)、⑤③島津明、内藤昭三、野村浩郷「助詞『の』が結ぶ名詞の意味関係の解析」(『計量国語学』15・7、昭61・12)、⑤④鈴木孝夫「意味と定義の関係について」(『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』18、昭61・12)、⑤⑤小野正弘「感情的意味」について」(『国文鶴見』22、昭62・12)などがある。また、⑤⑥坂梨隆三「おんぶする」(『東京大学教養学部人文科学科紀要(国文学・漢文学)』85、昭62・3)、⑤⑦山西正子「だれも」考」(『国語と国文学』昭62・7)は、いずれも現代語における特徴的な用法の由来を通時的に探ったものであるが、その用法とは、⑤⑧の場合「おんぶする」(「だっこする」も)が自他両用に用いられるということであり、⑤⑨の場合「だれも」が否定表現と強く結びついているということ、および「だれも」と「だれもが」とが否定、肯定といった役割分担をしているということである。こういった現象は通常なかなか気づきにくいものであり、そういった点を考察の対象に据えられた両氏に敬意を表する。更に、⑤⑩望主雅子「引照関係に基づく辞書語釈の考察」(『東京女子大学日本文学』66、昭61・9)、⑤⑪鶴丸弘昭「国語辞典の情報解析」(『日本語学』昭62・5)は、辞書の語釈に関するユニークな研究である。

### 三—4 語構成

今期この分野における大きな収穫として⑤⑫藤原与一「統昭和日本語方言の総合的研究—民間造語法の研究」(『武蔵野書院』昭61・9)が挙げられると思うが、本書は日本全国の方言を対象としたものであり、「方言」の欄で詳しく紹介されることを期待し、本欄では書名を挙げるのにとどめておく。

⑥⑬水谷静夫編「朝倉日本文語新講座Ⅰ 文字・表記と語構成」(朝倉書店、昭62・12)には「表記論を背景とした語構成論」という魅力的な題を冠した章があり、佐竹秀雄、野村雅昭、石井正彦の三氏が執筆しているが、表記と語構成との関わりに触れるところはあるもの

の、標題にあるような形での(表記)論と(語構成)論との関わりを論じたものには未だないような印象を受けた。なお、本書巻末の付録には精細な一覧表⑥水谷静夫「語構成要素の結合が担う意味の型」があり目を引く。

語構成を考える際には単語規定の問題を避けて通ることはできないが、この問題をめぐって今期次の論があった。⑥田島毓堂「語の単位——語彙論的見地から——」(「松村博司先生喜寿記念 国語国文学論集」昭61・11)、⑥仁田義雄「語をめぐって」(「女子大文学」38、昭62・3)。このうち⑥は、「語彙論的見地から」という副題があるが、特に語を計量する際の単位をどうするかという観点が強いように感じた。なおそれとの関連で、同氏には⑥語構成と語の計量——兼物語形容詞語彙を例として——(「名古屋大学国語国文学」59、昭61・12)という論もあり、「語構成要素表示試案」という興味深いアイデアが提示されているので参照されたい。

複合語は語構成の重要なテーマの一つであるが、今期同テーマに関するユニークな著作が二冊出た。⑥Yoshiko Tagashira, Jean Hof「日本語複合動詞ハンドブック」(北星堂書店、昭61・12)、⑥新美和昭、山浦洋一、宇津野登久子「外国人のための日本語 例文・問題シリーズ4 複合動詞」(荒竹出版、昭62・11)である。⑥は外国人のための複合動詞辞典であり、基本的な複合動詞二〇〇語に関して、それぞれ1前項動詞、後項動詞の意味と全体としての意味、2用法上の特徴、3文型、4例文を記したものである。冒頭の16ページにわたる英文の日本語複合動詞概説もすぐれたものである。⑥は外国人のための複合動詞問題集である。全体は、「総論」「動詞+動詞」「動詞+動詞」「名詞+動詞」の四章に分か

れており、第三章は更に、「時間相」「空間相」「様相、程度」「完遂」「再行、習慣」「失敗、難易」に細分化されている。各項目の下には、「動詞原型十はじめる/だす」「動詞原型十かける/かかる」「動詞原型十つづける」「動詞原型十おわる/おえる」といった具体的な結合パターン(以上「時間相」の例)が収められており、そのそれぞれに関して、意味、用法の簡単な説明と練習問題がついている。次に、資料集であるが、⑥野村雅昭、石井正彦、林翠芳「複合動詞資料集」(特定研究「言語情報処理の高度化に関する研究」報告書、昭62・3)が出た。本書は実際の用例と辞書から採集した七四三二語の「動詞+動詞」型の複合動詞を対象とし、「複合動詞連接表」「五十音順構成要素表」「前接(後接)率順構成要素表」などといった、異なった観点から作成された六つの表から成っている。複合動詞の概観をつかもうとする際には欠かせない資料となるであろう。

その他複合語に関する論としては、⑥野村雅昭、石井正彦「学術用語の造語法」(特定研究「情報化社会における言語の標準化」成果報告昭61・3)、⑥石井正彦「複合名詞の語構造分析についての一考察——学術用語を例に——」(「国語学」14、昭61・3)、⑥小田由美「局面動詞」(「しはじめる」について)、「横浜国大国語研究」4、昭61・3)、⑥窪園晴夫「日本語複合語の意味構造と韻律構造」(「アカデミア」(文学・語学編)43、昭62・9)、⑥斎藤倫明「複合動詞前項の音便化——意味との関わりについて——」(「国語論究」1、昭61・5)、⑥同「複合動詞音便形の意味——接頭辞化と「強調化」をめぐって——」(「宮城教育大学国語国文」16、昭61・11)などがあったが、このうち特に⑥には「造語実験」という新しい試みが見られた。

派生語は複合語と並ぶ重要なテーマであるが、今期は⑥樋口文彦

「形容詞からの派生名詞」(「教育国語」84、昭61・3)しか管見にはい  
 らなかった。ただし、接辞については雑誌「日本語学」の特集⑦「接  
 辞」(昭61・3)と⑦⑩関口伊都子「接尾語について」(「語学教育研究論  
 叢」4、昭62・4)があった。⑦⑯の後半には、一四種類の具体的な接  
 辞に関する解説があり、記述のスタイルは様々であるが、いずれも  
 比較的短いながらもよくまとまっており有益である。

以上の他に、今期は⑦⑰漆崎正人「複合語研究の歴史」(「藤女子大学  
 国文学雑誌」37、昭61・8)、⑦⑱同「派生語研究の歴史」(「藤女子大学藤  
 女子短期大学紀要(第1部)」24、昭62・1)といった研究史に関する力  
 作もあつたことを付け加えておく。

### 三―5 擬声語・擬態語

二で述べたように、今期は擬声語・擬態語に関する論が多く、雑  
 誌「日本語学」による特集⑦⑲「擬音語・擬態語」(昭61・7)もあつ  
 た。

個々の論では、⑧⑩山口仲美「写声語の性格」(「松村明教授古稀記  
 念 国語研究論集」)、⑧⑪同「音象徴語研究の一視点」(「国語語彙史の研  
 究」7)が目を引いた。特に⑧⑯は、古語を対象としたものであるが、  
 「写声語」(「現実世界に生起する声を写したことは」を「直写型」「掛詞  
 型」「聞きなし型」に分類し、第二、三の型は「写音語」(「現実世界  
 に起る種々の物音を写すことば」)や擬態語には見られない「写声語」  
 独特のものであるとする点興味深い。その他には、⑧⑫天沼寧「ぐし  
 よぐしよ・びしよびしよ ぐつしより・びつしより」(「大妻国文」17、  
 昭61・3)、⑧⑬日向茂男「マンガの擬音語・擬態語(1)」(「日本語学」  
 昭61・7〜12)、⑧⑭佐々木文彦「擬態語類の語尾について」(「松村明教

授古稀記念 国語研究論集」)、⑧⑮鈴木雅子「にここに。ここに。にここ  
 り・にかにか」(同右)、⑧⑯下河部行輝「三島由紀夫のオノマトペ――  
 「仮面の告白」に至るまでの初期作品について」(「国語学研究」26、昭61・12)  
 などがあった。⑧⑰は通時的研究である。前掲⑧⑱をここに入れることもでき  
 るが、特に⑧⑳は、マンガといった限定された資料を対象としながら  
 も、取り上げられている問題の多彩さから言って、むしろ現代日本  
 語における擬声語、擬態語の包括的研究と言っているものである。

対照研究としては、日英語を対照した⑧㉑関口伊都子「擬音語、擬  
 態語に関して」(「大東文化大学紀要(人文科学)」24、昭61・3)、日中  
 語を対照した⑧㉒瀬戸口律子「擬音語・擬態語研究のいくつかの問題点」(「大東文化大学紀要(人文科学)」25、昭62・3)の他、⑧㉓倪潔「視  
 覚に関する擬態語の日中対照研究」(「奈良教育大学国文 研究と教育」  
 9、昭61・2)、⑧㉔乙政潤「擬声語の日独対照(2)」(「大阪外国語大学学  
 報(言語・文学・文化)」73、昭62・3)、⑧㉕薛鳴「オノマトペについて  
 の日中対照研究――人間の行為に関する表現を中心に――」(「待兼山論叢(日本  
 学編)」21、昭62・12)などがあつた。

### 三―6 対照研究

対照研究については、各分野においてそのつど触れてきたので、  
 ここではそれ以外のものについて述べる。

中国語と日本語とは共に漢字を使用しているが、同じ漢字、ある  
 いは同じ熟語であっても、それが両国語において同じ意味を有し  
 ているとは限らない。従って、そういった観点から両国語を対照と  
 するということが従来からよく行なわれているが、今期そういった  
 問題を扱ったものとしては、⑧⑲金若静「同じ漢字でも――これだけ違



日本語と中国語——(学生社、昭62・2)、⑨張淑榮編、徳田武校閱「中日漢語対比辞典」(ゆまに書房、昭62・8)、⑩飛田良文、呂玉新「日本語・中国語意味対照辞典」(南雲堂、昭62・10)といった辞書形式のもの、および⑪飛田良文・呂玉新「中国語と対応する漢語」を診断する(「日本語学」昭61・6)、⑫淡島成高「中国系日本語学習者に見られる漢語誤用例とその分析」(1)「麗沢大学紀要」44、昭62・7)、⑬高俣建「日本の漢語における評価的意義特徴の一考察」(「語文と教育」1、昭62・8)などが見られた。また、「暗黒」と「黒暗」のように、日本語と中国語とで字順の異なるものについて考察を加えた⑭張麗華「日中同素異順語についての一考察」(「論集日語研究 現代編」)もおもしろかった。

その他には、⑮中島一裕、文燕友「日韓語授受表現の対照研究」(「国語表現研究」3、昭61・12)、⑯八村伸一「日・英語における色彩語の比較研究」(徳島文理大学比較文化研究所年報)4、昭62・7)などがあった。

### 三一七 その他(位相、慣用語、他)

位相に関するものでは子供の言葉についての調査、研究が比較的目的立ったように思う(前掲の心理学的な観点から見た⑩⑪も参照)。⑫真田信治「理解語彙量の累増過程——ことばの習得をめぐる事例研究——」(「大阪大学文学部共同研究論集」3 日本語・日本文化研究論集)昭61・1)、⑬梅村恵子「幼児と『テレビのことば』」(「金城国文」62、昭61・3)はそのうち理解語彙の研究であり、⑭野村雅昭、霧岡昭夫「小・中学生の作文の語彙調査」(「計量国語学」15・5、昭61・6)、⑮角居恭「発達段階における使用語彙の実態調査とその考察・序説」(「国語国文

研究と教育」16、昭61・3)は使用語彙の研究である。更に、⑯早川勝広、友定賢治「育児語の伝承」(「言語生活」昭61・8)、⑰友定賢治「女子学生を対象にした育児語調査」(「文教国文学」20、昭61・10)は、子どもの言葉そのものというよりは、大人が幼児に話しかける際に使われる特有の言葉(こういう言葉を、「育児語」というのは定着した用語なのであろうか)についての研究である。その他位相に関わるものでは、⑱池辺雅代「現代女性語の研究——字意語を中心に——」(「国語国文 研究と教育」17、昭61・11)、⑲森田良行「俗語・新語・老人語」(「国文学 解釈と鑑賞」昭62・7)、⑳川口容子「まじり合う男女のことば——実態調査による現状——」(「言語生活」昭62・8)などがあった。

慣用語については、㉑宮地裕「日本語慣用語考」(「大阪大学文学部共同研究論集」3 日本語・日本文化研究論集)昭61・1)を見逃すことはできない。慣用語の位置づけ、分類、用法上の様々な制約の問題、複合語との関わりの問題など、慣用語をめぐる様々な問題が手際よく述べられていて大変有益である。また、㉒吉田則夫「身体語を含む慣用語の表現特性——動物の部位名称を含む場合——」(「表現研究」43、昭61・3)は、標題のような慣用語のほとんどが「否定的ニュアンス」を有していることを論じていて興味深い。なお、韓国語との対照研究として㉓林八龍「現代日本語の慣用的表現の類型」(「論集日本語研究 現代編」)があった(前掲④⑤もここにに入れることができる)。

その他、命名、呼称に関するものが幾つか目についたが、ここでは、「配偶者の呼び方」「さん・氏・女史」「未亡人」についての調査、考察のある㉔遠藤織枝「気になる言葉——日本語再検討——」(南雲堂、昭62・5)の他、㉕陣内正敬「日本語の呼び掛け語」(「文学研究」83、昭61・2)、それに対照研究㉖金榮順「日韓両国語の自称詞・対称詞の

対照的考察」(『国語学 研究と資料』9、昭61・2)を挙げるにとどめる。

\* \* \*

一で触れたように、最近では語彙論と文法論の境界がはつきりしなくなってきたているが、よく言われるように、そういった傾向は動詞形容詞、副詞などの研究において著しい。今期ももちろん例外ではない。そこで、本欄を終えるにあたって、右の三品詞に関して特にそういった点から見て筆者の目にとまったものを列挙することにした。(動詞に関して)⑬森田良行「動詞の語彙面と文法面」(『国文学 解釈と鑑賞』昭61・1)、⑭同「自動詞と他動詞」(『国文学講座』時代と文法―現代語』昭62・7)、⑮堀口純子「意志動詞と無意志動詞の意志に関する一考察―「クレル」を中心に―」(『文芸言語研究 言語篇』12、昭62・9)、⑯森山卓郎「方向・移動の形式をめぐって」(『語文』49、昭62・9)、「形容詞に関して」⑩谷部弘子「話し手の評価を担う形容詞」(『日本語学』昭61・11)、⑪岡芳子「形容詞のいわゆる連用形」(『岡山大学国語研究』1、昭62・2)、⑫平野尊識「発話と話者の主観的部分―形容詞の意味と用法に関連して―」(『九大言語学研究室報告』8、昭62・3)、「副詞に関して」⑬渡辺実「比較副詞『よほど』について―副用語の意義・用法の記述の試み(口)―」(『上智大学国文科紀要』4、昭62・1)、⑭小林典子「序列副詞―「最初に」「特に」「おもに」を中心に―」(『国語学』151、昭62・12)。(前掲⑬をここに入れることもできる)。

四、おわりに

語彙の研究は、その対象の性格上まことに研究範囲が広く、国語学の他分野とはもちろん、国語学以外の様々な学問との関係も強い。

本欄ではそういったいわば語彙研究の多様性をできるだけ反映させるように努めたが、その分、個々の論文について充分述べることができなかつた。論文名を列挙するだけに終ってしまったところも多い。その点お詫びする。しかし、語彙研究という大きな枠組みの中で、各論を分類整理し位置づけるといいうのも重要な作業であると思う。それは出発点であると同時に到達点でもあるはずだからである。とは言え、規定の枚数を大幅に超過してなお、手元のメモの三分の一にも触れることができなかったのはいかにも残念であるし、重要なものを見落しているのではないかという不安も強い。なお最後になつたが、今回本欄を執筆するにあたって、国立国語研究所文献室、および図書館の方々に資料収集の面でお世話になつた。記して感謝申し上げる。

—宮城教育大学助教—